

巴

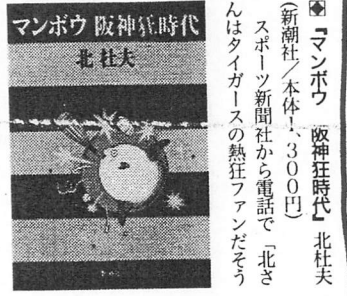
「永遠の不服従のために」「いま、抗暴のときに」に続く、著者がいまこれだけは言う！と覚悟を示した、低呼びかける。



抗 部作、白舟陣流、旗本破旗メディアと戦争の共犯、自由の庄殺……。国家が個人の人的価値を奪おうとする時、自分独自の、内奥からの「抵抗」を、読者一人ひとりに呼びかける。

●「株価暴落」池井戸潤 (文藝春秋) 本体1,571円
巨大スパー・一風堂を襲った連続爆破事件、企業テロを示唆する犯行声明に株価は暴落、一風堂への巨額な緊急追加支援をめぐって、白水銀行審査部の板東と企画部の二戸は激しく対立する。銀行の存在を賭けたすさまじい戦いが始まった。元銀行マンの乱歩賞作家が放つ金融ミステリー。

●「オトコのことばは猫に訊け」小手平連など市民運動を展開した鶴見俊輔に、上野・小熊の戦後世代が「無遠慮(上野)」に鋭く聞く。戦時下の日本軍慰安所の設置から占領軍への非協力、安保闘争、丸山真男や吉本隆明らとの交流、鶴見俊輔が何を考え、何ができなかったのか。これまで語ることもなかった事実がここに展開される。「戦後」を考える証言群でもある。



ですが」と言われ、怒った。「だそう」とは何事であるか！優勝もしくは最下位。負け負け勝ち負けの虎

ーシヨンだと、本書にある。幸せは「ネコ好き男」が運んでくるという著者はニューヨークで暮らす。犬好き男と猫好き男がどう違うのか。永遠の愛派か、終わりある愛派か。メルヘンの世界のようにだが、シリアスな人生の手引書でもある。

●「花のむこうにみえたもの」マミ川崎 (中央公論新社) 本体1,500円
マミ川崎は1940年代に日本で初めてのフラワーデザイン学校を創設、日本フラワーデザイン界のパイオニアだ。「植物を通してアートの世界を探ること、さらにその中から個を持つことの重要性と専らを知ってもらふこと」をモットーに歩んだ半生を振り返る。

●「日本のスイッチ」慶應義塾大学 佐藤雅彦研究室 (毎日新聞社) 本体1,000円
慶應文字佐藤雅彦研究室が、モードと新聞メディアを用いて質問事項を送る「日本のスイッチ」プロジェクト。参加総数216万人による日本像は？ 松井の試合が終わって、ヤンキースの勝敗おぼえていない人78%、そういえば最近、野良犬を見ない人83%。

ファン歴半世紀に及ぶ著者が、ヨガのポーズから念力を放射しつつ優勝を祈り、つづった阪神エッセーをここに集大成。

●「2004年版 プロ野球問題だらけの12球団」小関順二 (草思社) 本体1,400円
今年も始まったベナントレース。しかし、近鉄の球団名売却騒動や、巨人戦の視聴率低落など暗雲が……。カリスマなまき後、阪神は？ プレリーオフ導入で巻き返しはかかるパリーグの行く末は？ 生き残りかけた04年シリーズを見通す一冊。

文庫・新書

●「ボチ&コウの野球旅 ツルシカズヒコ」文 ワタナベ・コウ / 絵 (知恵の森文庫) 本体686円
東京ドーム、甲子園だけが野球場じゃない。「松坂を見に高知へ行く」のひと言から始まった、ライターとイラストレーターによる地方野球めぐり。普通列車を乗り継いで

論じる。

●「父と娘の昭和悲史」紀平梯子 (河出書房新社) 本体1,500円
暴力的な時代を嫌う人だった――その革新的言動で九州帝大を追われ、新聞社論説委員、参院議員と激動の昭和を生きた故佐々木雄氏。その時代を覆っていた空気を、父の視点を変えながら、娘である著者が描き出した。『軍力と戦争と無常 苦業と山情』の著者。『父と娘の昭和悲史』と『父との共闘』と言ふ本書は昭和史の闇を照らし出し、今を問い直す契機にもなる。

●「マニフェストで政治を育てる」藤森克彦・大山礼子 (雅粒社) 本体1,200円
先の衆院選で注目を集めたマニフェストは、今果たして政策化され実行されているか。今後さらに重要度を増すマニフェスト政治を育てるために、有権者が持つべき視点を、マニフェストが一般化した英国議会政治を研究した、富士総研研究所と駒大教授の両著者が解説する。

●「戦争が遺したものの」鶴見俊輔 上野千鶴子 小熊英二 (新曜社) 本体2,800円
駆けめぐれば、客席風景、球場内外のうまいものなど外野の魅力も満載。

●「日本全国 ローカー線おいしい旅」嵐山光三郎 (講談社現代新書) 本体700円
金さえ払えば松阪肉はどこでも食えるが、ホルモン焼きは紀勢本線・松阪の回転焼肉「二升びん」。B寝台で広島へ、新幹線名店街の「むぎし」で「ごうどん」と元祖ねぎむすび。温泉王の選ぶ鉄道旅は「スローでゼイタク」。各地名物料理を食へ歩く旅の快樂ガイド。

●「追憶の作家たち」宮田穂菜 (文春新書) 本体720円
「人生を知らない者に人間が描けるはずではない」と松本清張が語る時、生きてきた長い時間の痛苦や屈辱を見る思いがした。何でも確かめずにはいられない少年みたくだった大岡昇平。文芸誌「海」の元編集長がわが愛する作家たち7人の実像を回想する。ほかに西條八十、埴谷雄高、島尾敏雄、石川淳、日野啓三が登場。